

和辻倫理学と「支那」認識の思想史

——論説「支那人の特性」と『風土』『シナ』節の比較——

弓 谷 葵

はじめに

和辻哲郎（二八八九—一九六〇）の論説「支那人の特性」は、『思想』一九二九年七月号（「支那特輯号」）の巻頭に掲載されている。この論考はのちに『風土——人間学的考察』（一九三五年初版）において、第三章「支那」の節となつて掲載されるものである。『和辻哲郎全集』（岩波書店第八巻には、「付録」としてこの論考が収録されているが、「支那人の特性」という本来の題目は記されておらず、「昭和四年版『風土』」となつている。

しかし、『風土』の一九四四年改訂版において、この

「支那」の節はカタカナの「シナ」となり、その内容は大幅に書き改められる。「初稿」である「支那人の特性」を、ほとんど手を加えることなく『風土』の一部分とした一九三五年版の「支那」の節には、文化論の趣はほとんどない。それは時局論といつてよい性格のものである。ヨーロッパ留学の途上において、帝国主義的分割のなかにある「支那」——実際には上海・香港における「人間」の様相が和辻に与えた違和感、文化論として整理される前段階の「直観」による表現が、文化論的時局分析というべき形を和辻にとらせている。言葉どおり「風土」の観察を主題とした「シナ」節をふくむ、のちの『風土』と比較すると、『風土』初版の内にある「支那」の節は、「風土」の類型論と

してはふさわしくない、特殊な存在感をもっている。それは、「支那人」論という生々しさが放つ存在感である。本稿は、『風土』『支那』（「シナ」節が経た〈書き換え〉内容を比較検討し、和辻の、「支那」論の変容と「倫理学」という方法を関連づけて、解釈しようとするものである。

『風土』一九四四年改訂版の「序言」において、和辻は、「当時の左翼理論への駁論」という要素を「洗い落して純粋に風土の考察に引き直した」と述べている。しかし、この簡単過ぎる「序言」は、かえって、「洗い落し」たもの大き過ぎることを示してはいないだろうか。

和辻倫理学とは、和辻によってなされた、「倫理学」そのものの確立、「倫理学」という定義自体の生産を意味する。「支那人の特性」という「初稿」から『風土』の一部へ、という和辻の「支那」（「シナ」論の〈書き換え〉の中には、和辻倫理学が体系化されたとき、それ自身を裏切る可能性となるものが含まれていたのではないだろうか。

論説「支那人の特性」を『風土』の「初稿」とすることは、『風土』初版と一九四四年改訂版との間の大幅な〈書き換え〉を、単なる「書き改め」として受け取ることを意味する。それはまた、「もともと一つの連関に於て考へられたものであるから」（一九三五年『風土』初版「序言」という和辻の弁明を、言葉のとおりにとらえること、「風土」

論という形式への推移の必然性を、和辻とともに認めることである。本稿の目的は、この〈書き換え〉において「洗い落」されているものを読み取ることによって、和辻倫理学という方法が確立したことの意味を考察することにある。それは、大幅な改訂によって和辻が隠蔽している何かを、暴露しようとかいう意味ではない。それらの問題が和辻にとつては、「当時の左翼理論への駁論」として言いまとめることのできた内容であり、「書き改め」といつて差し支えない軌跡であった、ということこそが重要なのである。別言すれば、方法としての「倫理学」が、和辻から奪ったもの、和辻に捨てさせたものとは何なのかを、見極めていくための作業である。短すぎる「序言」が示す「倫理学」確立への過程は、和辻にとつてではなく、完成された和辻倫理学を前にする、いまにとつて、大きな意味を持つと論者は考える。

本稿は大きく二つの節に分けてあるが、中心となるのは、『風土』『支那』（「シナ」論における〈書き換え〉）を検討する節である。一節は、本稿が和辻倫理学という名前で表そうとする、和辻的「倫理」の様式を提示しようとしたものだが、和辻倫理学とは何か、という大きな問題にふれられるほどの準備は、本稿にはない。一節は、あくまでも二節に関わる内容に限って、和辻「倫理学」の理解を断片的に

取り出してに過ぎない。

一 和辻倫理学における「倫理」と「人間」

はじめに、本稿にとつて、和辻倫理学という体系がどのようなものとしてあるのかを、『倫理学』というテキストに現れる構図を中心として述べておきたい。戦中と戦後をまたいで試みられ、改訂を重ねて更新された『倫理学』というテキストを、ここでは、和辻の思想史を支え、「風土」論という分析の形態を支えることを可能にした、和辻自身の「根本倫理」の最終型を確認するものとして、とらえておきたいと思う。

(1) 歴史哲学としての「倫理学」

第一に確認しておきたいのは、和辻倫理学が、帝国日本の世界的立場をめぐる知識人の言説のうちの一つであり、和辻がつくり上げた歴史哲学の体系である、ということである。『倫理学』が構想する「倫理」の体系は、一つの「人間存在」と「人倫的組織の人倫的組織」たる国家とを、段階的に結びつけるものである。

『倫理学』において、あらゆる形態の「存在共同」はすべて、「人間存在」の内奥からの欲求に沿ったものである

とされている。和辻にとつて、孤独はそれすでに渴望であり「欠如態」でしかない。「人間」が「存在」するとは、共同体にいやおうなく帰属することである。和辻の「間柄」的な「人間」の定義は、以下のような「歴史」の定義を導き出す。

歴史とは、国家を形成せる統一的な人間共同体が、超国家的場面において自己の統一を自覚するとともに、この統一な共同存在の独特な個性を規定している過去の内容のうちの主要なるものを、共同の知識として何人も参与し得るとき客観的公的な形に表現したものである¹⁾。

従つて、和辻のいう「歴史」とは、「人倫的組織の人倫的組織」たる「国家」をいち早く形成した者たちによる「世界史」であり、正当化された権力である。和辻倫理学においては、「歴史」に名を残すことのない多くの「人間存在」にも、「参与の可能性」だけは公平に開かれていることとなる。

一つの「人間存在」と「国家」とを段階的に結びつけるのは、「全体性」へと還ろうとする「人間」の本来的な「否定の否定」の絶え間ない運動であるとされている。この「弁証法的関係」が相似形となつて、「歴史」の主体としての完成型である「国家」の關係に、適用される。すな

わち、身体である「国土」を害うことなく、「歴史」的に連綿と拡大していく「国家」こそが、「倫理」的基準によれば、より高次の「存在共同」であるということになるのである。

和辻の構想する「倫理」の一面として、「世界史」に参入する「歴史哲学」を支えるものであるという、この機能性を、前提としておさえておく必要がある。

(2) 「人間」概念を生産する「倫理学」

第二に、和辻倫理学とは、「倫理学」という方法が和辻によって学問として確立されたことであり、「倫理」「人間」という概念が和辻によって根柢的に解釈し直され生産された、そのさき完成するものだということである。〈和辻的〉であることと、〈日本的〉であることは別である。確かに、子安宣邦が指摘するように、和辻倫理学は「昭和の「われわれ」の倫理学」である。しかし、和辻によって生産された「倫理」の定義が、「倫理学」そのものとして確立してしまうことのおそろしさは、もう少し根本的なものだ。日本語の語義解釈から始められる「倫理学」の定義が、「人間」そのものを改編する要求であること、それが学問として確立されていることのおそろしさである。

『倫理学』が示すのは、周知のように、「二人共同体」

夫婦の結合を最小単位として出発する、「存在共同」のあり方の「人倫的」な発展過程である。そこから「私的」な結合の欲求を昇華させていくことで、最終的には文化共同体（＝「民族」）、そして国家構成員としての「役割り」を担う一つの「人格」となることが予定される。和辻にとって重要なのは、「滅私」と言い表されるものが、強いられた義務ではない、という点である。「私的」なるものの抑制は、「全体性に還る」という「人間存在」の本来的な運動（人間存在の「否定的構造」）であると説かれ、より大きな「存在共同」へと含み込まれることが、一つの「人間存在」の「拡大」という積極的な意味を持たされる。より高次の「人格」とは、決して道徳的自律によって目指されるものではないことを和辻は説く。「人間」はその語義解釈からして本来的に「倫理的」なるものだ、という和辻独自の「倫理」概念は、「倫理」という言葉に執拗にからみついていた／いる外的強制性を、「人間存在」が当然持つべき「結合」の欲求として、価値顛倒させ得るものなのである。

『倫理学』第一章「人間存在の根本構造」において、「人間存在」の「自他不二的同一」の自然性を準備として述べた後、その最終節で和辻はこう宣告する。

もしこの理法をはずれば人間存在は存在し得なくなる。……しかるに我々は最初に、人間共同態の存在根

概、すなわち人間存在の理法を、倫理として規定して来た。しからば右のごとき根本的理法こそまさしく根本倫理であると言わねばならぬ。

このようにして否認されるのは、単に、西洋近代主義的「個人」の「抽象」性だけではない。「この理法」から、すなわちこの「倫理学」からはずれた例外は、自動的に「人間」概念からはずされてしまう。「歴史」から、あらゆる帰属の仕方から、放逐されるべきものとみなされるのである。

次節でみていく「支那」(「シナ」)論の〈書き換え〉という和辻の道程は、和辻倫理学が確立する、その道程である。論者は考えている。それは同時に、「倫理学」が文字通り「人間」を取りまとめてしまう「人間学」とイコールになっていく、という和辻「倫理学」確立の経緯が、和辻自身の手によって、理論的に実践される現場なのである。

二 「和辻の」「支那」(「シナ」)論について ——〈書き換え〉前後の比較検討

論説「支那人の特性」が大幅な改訂によって『風土』「シナ」の節となったとき、和辻の「倫理」の定義は、すでに世界的構想を語りうる、確固たるものとなっていた。和辻的「倫理」がもつ普遍性・平等性とは、「歴史」とい

う舞台への「参与の可能性」である。「支那人の特性」という論説は文化論的時局分析だと、はじめに述べた。しかし、その後の〈書き換え〉は、和辻が時局の推移に沿って施した変更なのではない。和辻がおこなったのは、「風土」論すなわち、「倫理学」体系という独自の〈世界史の哲学〉に、「人間」概念を包括しうるほどの力を与えていく、和辻「倫理学」確立への作業なのである。

一九三五年『風土』初版の「序言」において、和辻は、「初稿」を「風土」論の一節とすることについて次のように述べている。すなわち、「草案の形をそのまま、保存しているのは最後の一章のみに過ぎない」が、「もともと一つの連関に於て考へられたものであるから」ここに「一先ずま」とめておく、と。そして、その言葉どおり、「支那」の節は、一九二九年の論説「支那人の特性」をほぼ変更なく——題目だけを忘れ去ったように——使っている。本稿の冒頭で短すぎる「序言」といったのは、一九四四年『風土』改訂版のものである。

この度新版を出すに当って第三章の内シナの部を書き改めた。もとの文章は昭和四年、左傾思想の流行していた頃に書かれたもので風土の考察に当時の左傾理論への駁論を混へていた。今それを洗ひ落して純粹に風土の考察に引き直したのである。

昭和十八年十一月

著者⁽⁵⁾

この「序言」は、「書き改めた」内容について何も語っていない。ここでの和辻は、「純粹に風土の考察」ではなかった過去の自身の「支那」論について、それは「左傾理論」への反撥の所産であったと自己診断している。以下でみていくように、〈書き換え〉によって抹消された削除部分などは、確かに、「左傾理論」批判とみなすべき内容であるといえる。しかし、「支那人」論から「風土」論への転換を可能にしているのは、削除や変更それ自体ではない。大幅な構成の変化によって、もともとの「支那人」論が異なる論調の流れの中で利用される。和辻のほどこした「書き改め」とは、そのようなものである。

(1) テキストの比較

以下で比較対象としていく和辻の「支那」(「シナ」)論は、次の四つである。便宜上、文中では論考A〜Dと記す。

A 「支那人の特性」(一九二九年)

B 『風土』第三章「モンスーンの風土の特殊形態」

「シナ」(一九三五年)

C 『風土』第三章「モンスーンの風土の特殊形態」

「(一)シナ」(一九四四年)

D 『風土』第三章「モンスーンの風土の特殊形態」

「(一)シナ」(一九四九年)

これらA〜Dについて、ごく俯瞰的な点だけをさきに述べておきたい。AとBの間には、冒頭から述べてきたように、大きな変更はない。送り仮名と誤字の訂正、一九三五年時点での和辻自身の、短い付言⁽⁷⁾が加えられたのみである。CとDの間には、構成に大きな変化はないが、いくつかの語句の変更と末尾の書き換えがなされている。本稿でくわしく比較していくのは、主にBとCの間になされた大幅な「書き改め」であるので、図式的にはA B対C Dという対比で考えることになる。

ここで、本稿の論点にとって重要となるかぎり、主な〈書き換え〉の部分を中心にあらかじめあげておきたい。

① A及びB「彼ら「支那の労働者」―引用者」は無政府の生活に徹底し、国家の保護力を予想することなく生きているのである。平素国家の権力を否定すべきものと主張しつつ、おのが生命の脅威を感じるに当つて直ちに国家の権力の保護を求めるといふやうな卑怯さは、——或は国家の権力を否定する主張さへも国家の権力の保護の下にその保護を予想しつつ、行ふといふ卑怯な矛盾は、彼らには毫も存しない。

C及びD「彼らは無政府の生活に徹底し国家の保護力を予想することなしに生きている。それが彼らの血縁団体や

地縁団体を緊密ならしめる所以なのであるが、また同時にこの小さい団体を超えた強大な力に対して率直に抵抗を断念し忍従の態度をとる所以なのでもある。」

② A及びB 「これが支那人である。内乱に際して、しかも市外に砲声が聞えるときにさへも、彼らの示しているこの無感動、……彼らの根強い金銭追求の努力は、かゝる無感動の上に立ち、赤裸々の力と力との角闘かくとうに於て、あくまでも金銭それ自身を目的として行はれるのである。……その執拗しやくおつと根強さに於て日本人の如きは到底彼らに敵することが出来ない。……これは日本人が生存競争に於て支那人よりも弱いことを意味するが、しかし同時にその心情に於て遙かに多く人間的であることを意味する。」

C及びD 「シナ人が無感動的であるといふことは、シナ人が感情生活を持たないといふことではない。シナ人の感情生活の様態が無感動的であるといふのである。空漠たる単調さに於ておのれを見出している人間は、変化を求めて感じ動くことを必要としない。この点に於ては、極めて変化に富む質的多様性に於ておのれを見出している日本人は、シナ人の相反の極にあると云つてよい。……もともと彼らは動じないのである。従つてその態度は道徳的な功績を意味するのではない。」

③ A及びB 「無感動的な人間生活は、かゝるおのれをのみ

常に見出し、それ以外のおのれを見出す機会が少ないといふ特殊な風土的負荷から理解せられ得るであらう。揚子江の河口地方が支那の国土全体を代表し得ると自分は云ふのではない。たゞ地理的に計量して量が大きいといふことが直ちに質の偉大さを印象するのでないことを云ふのみである。……我々人間の表象能力には一定の限度があり、それ以上に我我わががの感情は進み得ぬ。」

C及びD 「揚子江とその平野との姿が我々に与へる直接の印象は、実は大陸の名にふさはしい偉大さではなくして、たゞ単調と空漠とである。……そこで受容的忍従的な性格は、この単調、空漠に堪へ、切るところの意志の持続、感情の放擲、従つてまた伝統の固執、歴史的感覚の旺盛となつて現はれる。」(傍点原文)

④ A及びB 「かゝる性格の相違を我々は軽視してはならない。支那人は生活の芸術化を全然解せざる實際的国民であり、日本人は生活の芸術化をやり過ぎる非實際的国民である。その点において支那人は猶太人よりもつと猶太人的であり、それに反して日本人は、ギリシア人よりもつとギリシア人的である。日本人がその団結を失つて個人の立場に於て支那人と対するならば、日本人は到底支那人の敵でない。さうして支那人が勝つといふことは、人間性にとつては一つの退歩である。」

C 「シナは復活しなくてはならぬ。……大東亜共栄圏はシナの文化復興を欲する。日本はその自覚の媒介をなすものである。徹底的に米英の植民地に化する方針を固執する如き財閥軍閥たちは、シナ民族自身の敵に過ぎない。シナ民族はまづ米英の勢力をはねのけて自らの足場に立たなくてはならない。そこに偉大なるシナの復活が始まる。」

D 「シナは復活しなくてはならぬ。……世界の文化の新しい進展にとつてはシナの文化復興は必要である。徹底的に外国の植民地に化する方針を固執するとき財閥軍閥たちは、シナ民族自身の敵に過ぎない。シナ民族はまづ自らの足場に立たなくてはならない。そこに偉大なるシナの復活が始まる。」

さきに少し述べたが、A B対C Dの間の〈書き換え〉について、本稿が注目したいのは、語句の修正や削除それ自体よりも、その〈書き換え〉のもつ特性である。それは、大幅なパラグラフの組み換えによって可能になった〈書き換え〉なのである。右に挙げた引用部分はほんの一部に過ぎないし、また、どこがどこの〈書き換え〉なのかを明確にするのは難しい。和辻の施した〈書き換え〉とは、確かに、「支那人の特性」を「初稿」として持ち、それを再生させたものである。しかし、にも拘わらず、〈書き換え〉前後の二稿は、全く異なる音調へと変化しているのである。

「初稿」のパラグラフを分割して「風土」論の主題に埋め込むことで、「観察者」の直観が、「風土」論の根柢にすり替えられていくのである。和辻自身の意図がどうであったのかは問題でない。むしろ、そのすり替えは、和辻倫理学にとつて重要かつ必然的な作業としてあったのではないか、というのが本稿の立場である。

(2) 「支那」という不安の契機

和辻が「瞥見」した「支那」を語るのには、帝国主義支配が租界となつて食い込んだ上海・香港において観察した「一一の直観的な姿」によつてである。一九二七年、京都大学助教となつた和辻は三年間のヨーロッパ留学を命じられる。上海、香港、シンガポールはその経由地であつた。ひとつはジャンク船に武器と妻子を積載して「生活」する「支那の労働者」の姿、もうひとつは、ストライキに「物情騒然」となる上海の街路で、「茫漠とした顔付」で商いと賭博を続ける姿である。「これが支那人である」。和辻はこれを「無感動的」と評し、「金銭追求」の力すなわち生活を営む個々人の力の強靱さに、衝撃を受ける。「国土」を侵され、いつ内乱によつて砲撃に襲われるかも知れない情況の只中で、「支那人は実に頑固に「支那人」であるといふ」。国家としての「支那」が脆弱であるのに比べ、「支

那人」はあまりに「のんきさう」である。その「無感動と打算」が持つ「生活」の力の強靱さに、和辻は衝撃とともに、「支那人の特性」を見出すのである。

〈書き換え〉①は、ジャンク船上の「支那の労働者」についての叙述部分である。A及びBの引用部分は、C及びDでは削除されている。二つの「直観的な姿」の描写は、C及びDにおいては、「無感動」と「忍従」という、「シナ」の「風土」の類型が論じられた後に挿入され、根拠として生かされているのである。和辻はここで、「血縁団体」「地縁団体」という、『倫理学』における「存在共同」の様式を「支那の労働者」に適用し、認めている。同時に、「無感動」の態度は、植民地的状況においても「国家」の変革への意識に至らない「忍従」の態度とみなされていく。この〈書き換え〉から推測できるのは、「支那人」論が「風土」論の体裁に変更されたとき、和辻が、自らの「直観」が捉えた「支那」像から、当初の衝撃を抜き去り、「倫理学」の言葉を使って〈理解しうる〉範囲へと、「支那」を抱き込んでいく様子である。

「風土」論が成立することによって、抜き去られた衝撃とはどのようなものであろうか。それは、和辻に直観的な不安を与えることとなった、「支那」の印象そのものである。「支那人」の生活態度は、「私有欲の権化」として批判

すべき近代的個人主義であるとともに、「国家」や「制度」抜きに「支那の労働者」を生かす、「個人」の可能性をも、観察者の「直観」は捉えたのである。和辻は、その衝撃に従って、素直に「支那人」を捉えた結果、この両義性を論理的に整理しないまま、「支那人の特性」を書いたのである。「私有欲の権化」とほぼ同義語のように使用される「猶太人」の語は、二ヶ所とも、CD論考からは削除されている。「支那人」の「金銭追求」の力をほとんど生理的に嫌悪する和辻の激しさは、明らかに〈書き換え〉によって洗い落とされている。しかし、両義性の一側面、すなわち「生存競争」の力としての「打算」「实际的」性格に対する評価の不安定さも、また、〈書き換え〉以前の和辻は、素直に表しているのである。

すでに『風土』の一部となった「シナ」論から、洗い落とされているのは、この両義性の実感が和辻にもたらした迷いである。この迷いの根源とは、すなわち、「支那人」の「無感動と打算」の態度から照射されて、「国家」と「個人」の問題が無意味化することにある。〈書き換え〉によって削除された①A及びBの叙述は、そのような直観の未整理が現れた部分ではないだろうか。生活における「無政府的」態度に、放縦・狡猾な「国民性」を見出して批判する、その一方で、それが「個人」の、「国家」や

「制度」からの自由であることを、和辻は決して否定的とは言えない音調であらわしてしまっているのだ。

(3) 削除された不安

AB論考において和辻が表していたのは、「支那人」という「存在」の仕方に対する不安であったといえる。それは、のちに「風土」論へと重点を傾けることによって消し去られることとなった。ここでは、もうひとつ、C論考への〈書き換え〉によって、すっぱりと消滅させられている部分を挙げてみたい。「十六世紀頃の切支丹事件及び現代に於ける共産党事件」を論じた箇所である。これは、和辻の「序言」の言葉を言葉どおりに捉えた場合に、「左傾理論への駁論」に該当する部分でもあるだろう。しかし、注目したいのは、この部分が抜け落ちたことよって、AB論考が持っていた和辻の直観的不安の音調が大きく殺がれているということである。

まると削除されたこの部分は、香港と上海での「直観的な姿」を挙げた直後の文脈に位置していた。その削除部分と、CD論考において「直観的」な事例の直後にあたる部分とを、並べて対比してみたい。〈書き換え〉②としたのがそれである。

ABにおいて、和辻は「無感動的な性格」と「日本人の

易感性」を対比し、前者の「生存競争」における強さに対する抗させるかのように、後者を「人間的」と規定している。「この対比」をするための事例として、殉教と共産主義革命とが論じられているのである。この削除部分の内容を確認してみたい。それによって、〈書き換え〉前後の音調の変化を、より鮮明に捉えることができるのではないだろうか。

和辻はこの部分で、キリスト教信仰とマルクス主義を例にとつて「日本人」と「支那人」の国民性を「対比的」に取り出していく。本家ヨーロッパ人をも感動させた「純粋な殉教者」を生みだした日本。他方、信仰が「心情全体の革命」にまでなり得ない「無感動」的な「支那」は、「弾圧迫害」の歴史とも縁遠く、外からの「文化的影響」を深く受けることもない。「現代」において、前者は「昔の切支丹」と同じ「迎へ方」で「マルキシズム」を迎え、「純粹」で「勇敢」な「実践的理想主義者」を生みだす。一方、「支那」における「打倒帝国主義」「日貨排斥」という運動は、あくまでも「資本家的企業」による「事業」に過ぎない。それを支持する民衆はまた、「戦争といふ労働」に「投資」という利害打算のうえにのみ行動するものである。和辻はこのように述べ、節の後半で、「日本人」的な「プロレタリア革命」の認識からする「支那の労働者」

理解に反駁していくのである。

共産主義革命が破壊すべき「私有制度」は、そもそも「支那」にはないと和辻は言う。なぜなら、「支那人」の財産を肥えさせ、保護しているのは「支那以外の国家の権力」だからである。「革命家」は、「支那」における「無政府」的状态が、「支那人の特性」そのものから帰結されるものであることを認識しなければならない、と和辻はいっているのである。

支那に於て破壊しなければならぬのは、実は「制度」でなくして、人々がおのれの財産を生命の危険の下にでも守らうとしているその「私有欲」である。……民衆は社会的正義の実現といふ如き実践的理想主義に動いているのではない。彼らは私有欲の権化である。撲滅さるべきものがその撲滅の出所である。

「支那」における「資本家階級」とは諸外国勢力であり、「従つて真の階級争闘は国際戦争とならざるを得ぬ」と和辻は述べるが、ここではむしろ、「私有欲から出た農民の力」の根強さ、「革命」の不可能を暗示するかのようにより、「支那人」と「日本人」の比較対照が開示されているのである。

和辻の直観的不安は、「支那人」の「存在」の仕方に対するものであるとさきに述べた。それは、和辻的「人間」

の圏外を見せられたことからくる不安である。和辻は、「支那人」に対する真つ向からの批判的態度と、確かな距離の認識とを、「支那」を「風土」論におさめることによって、一度に手放したといえるのである。

(4) 「シナ」認識としての「風土」論

A B 論考では、以上にみた削除部分の後、「支那」の「国土」の観察が開示される。(書き換え)③ A 及び B はその一部の引用であるが、これも、並べて対比した C 及び D の引用が、厳密にその(書き換え)の箇所該当するものとはいえない。C 及び D の引用部分は、『風土』「シナ」節の冒頭に位置する。揚子江の平野という「風土」から取り出された「無感動的」「忍従的」性格は、黄河の「風土」において取り出された「非服従的」性格と並べられ、「シナ」的性格の類型化を完成させている。

A 及び B の引用部分は、論考中、唯一「風土」という語が登場する箇所でもある。しかし、この「風土的負荷」とは、どのような意味合いなのか。類型としての「風土性」と、それは全く同じものであろうか。

同じく A 及び B の引用にあるように、和辻は「我々人間の表象能力には一定の限度があり、それ以上に我々の感情は進み得ぬ」と述べている。「茫漠たる大陸」は、「人間」

をひとしく「無感動的」にする、まさしく「負荷」＝マイナスの圧力だということになる。(書き換え)②として挙げた対比にあるように、A B論考において和辻が使用する「人間的」「人間性」の語は、「無感動的」の反義語であるといつてよく、「感情」の動き易さを意味していた。そして、「日本人」的性格を「支那人」のそれと対抗させる、唯一の切り札であるかのように使われていた。

しかし③C及びDの引用において、「無感動的」であることは、シナの「風土」とされることによって、「人間」の一つの類型として扱われているといえる。「単調空漠に堪へ切るところの意志の持続、感情の放擲」という、「人間」の「存在」の一つの仕方として、「支那人の特性」は「風土性」の一類型におさめられていく。過去に衝撃と不安をおぼえた「支那」の「特性」を、「シナ」的「風土」として認めることによって、和辻ははじめて「シナ」認識を得たのである。

(5) 「倫理」外の異物から、未来的「他者」へ

最後に、〈書き換え〉④として挙げた三論文の結び部分にふれながら、考察の結果をまとめてみたい。

和辻の眼に「直観的な姿」として現れた「支那」は、「打算」によってのみ行動する「私有欲の権化」である一

方、その同じ「特性」のゆえに、生活の地盤を個人そのものに帰することのできる強韌さを持っていた。(書き換え)後の「シナ」論において、和辻は、そのような「特性」の両義性に対する、自身の理論的立場の不安定さを克服しているといえる。洗い落とされたのは、「無政府の生活の強味」あるいは「私有欲から出た農民の力」と言い表されていた、「支那」に対するねじれた畏怖であり、同時に、〈相容れなさ〉の認識であったといえるのではないだろうか。

それはまた、和辻的な「倫理」「人間性」の概念自体を拒否する、「人間存在」の別の可能性となり得るものでもあった。なぜなら、和辻倫理学が拠りどころとしていくのは、〈相容れなさ〉を克服することで調和をもたらす「人間」概念だからである。和辻は「支那人」の行動様式において、「国家」への期待も、文化的「国粹」をそこに具現化しようとする「国土」への執着も、見出すことができなかつた。外国勢力に侵された「国土」において「頑固に支那人」であり続けている、という印象は、帰属することで保護を期待しうる、そのような共同体の支配から自由であることを、「支那」がその植民地的現実をもって、和辻に与えたものなのである。これは、一節で述べた、和辻倫理学の価値顛倒の試みを、ふたたび転覆させる危険な可能性にほかならない。

和辻の見た「支那人の特性」は、「風土」論とそれを支える和辻倫理学にとって、回収しなければならぬ「特性」だったのである。

〈書き換え〉④にみられる対照は、「支那」への絶対的な距離感、〈相容れなさ〉の感覚が消滅させられていったことを示しているだろう。A及びBにおいては、「かゝる性格の相違を我々は軽視してはならない」と述べ、「生存競争」への不安を「日本人」の結合によって乗り越えようとする。C・Dにおいては、「支那」の古代文化を評価することによって、「大東亜共栄圏」あるいは「世界の文化」の一部たる「シナ」をもとめてみせる。

④A及びBの直前に、次のような記述がある。「日本人は維新までの千数百年間、かゝる支那文化に浸り、おのれを空しくしてそれを模倣しようとした。しかし……日本人は遂に支那の性格を帯びるには至らなかつた」。和辻はCD論考において、この部分をそのまま生かしながら、その前後には、以下のような二つの文を割り込ませている。「おのれの性格を明かに認識することは、その性格を超えて進む道をもささることである」、「それにも拘らず日本の文化は、先秦より漢唐宋に至るまでのシナ文化の粹をおのれの内に生かしているのである」。和辻倫理学の体系にとって、言語と芸術は「文化共同体」の「倫理」的媒介物

とされている。⁽⁸⁾〈書き換え〉後の「シナ」は、すでに、かつて和辻に不安を突きつけた「支那」ではない。和辻は、一度は、「支那」を異質な対象物として「倫理」の圏外におしこめることによって、その不安に対抗した。そして、和辻倫理学の確立とともに、「シナ」は「過去の高貴な文化」の再興を通して「人倫的」に結合しうる「他者」、未來的な「なかま」となったのである。

おわりに

本稿では、C論考とD論考の間の〈書き換え〉についてはふれることができなかった。『風土』初版の成立時期と、一九四四年という改訂の時期の時局の緊迫性と、和辻倫理学の発展過程の関連をふくめて、検討する必要があると考える。〈書き換え〉④に挙げたように、「大東亜共栄圏」の文字を削り、「米英」の語を「外国」に置き換えるという、和辻の音調の変化は、時局の緊迫と逆行するかのようである。しかし、和辻は、その「直観的」表現ゆえに持つていた攻撃性と、その裏面である距離の感覚——いいかえれば〈境界線〉にたいする畏怖を、柔和な普遍的「倫理」「人間性」にくるんで、みずからの「世界史」の中に「シナ」を取り込んで行ったのである。本稿が追ってきた〈書き換

え)の姿とは、そういうものであった。

「人倫的組織の諸段階は空間性から風土性への過渡段階である」と和辻はいう。「空間」はそこに生きる「人間存在」と呼応し合ってはじめて「空間性」となり、また同時に、「人間存在」の本来的な「倫理」性を担保する「風土」となる。この言葉は、本稿で追った〈書き換え〉という和辻の作業それ自体を、あらわしているように思える。繋がる期待のなかった「支那」という異質な「空間」を、和辻は「風土」として掴み取ることによって、そこに、自らの規定からする「人倫的組織」を立ててみせたのである。

注

- (1) 和辻哲郎『倫理学』第四節「人間存在の歴史的風土的構造」第一章「人間存在の歴史性」。以下、『倫理学』からの引用はすべて、『倫理学』岩波文庫版(全四冊、二〇〇七年版)による。
- (2) 子安宣邦『和辻倫理学を読む——もう一つの「近代の超克」』青土社、二〇一〇年。
- (3) 『倫理学』第一章「人間存在の根本構造」第五節「人間存在の根本理法(倫理学の根本原理)」。
- (4) 『和辻哲郎全集』第八巻、一頁。
- (5) 同右、三頁。

(6) A・B・C・Dの各論考の引用は、それぞれ次の資料による。A・『思想』(岩波書店)一九二九年七月号(「支那特輯号」)。B・『風土』一九三五年初版、岩波書店。C・『風土』一九四四年版、岩波書店。D・『和辻哲郎全集』第八巻。C論考のテキストは、米谷匡史氏(東京外国語大学)の蔵書を、荻部直氏(東京大学)を通じて参照させて頂いた。両氏に謝意を表したい。

(7) 『風土』初版「支那」節においては、本文のあとに「昭和四年」と奥付が記されたあと、以下のような付言がある。「以上の観察を書いたときに比べると、支那の事情は著しく変った。最も著しいのは南洋における支那商人の勢力の減退である。これが本土における軍事企業の形勢をも変へて来た。然しこの五六年の間の目まぐるしい転変——満州事件、上海事変、国際連盟に於ける日支の抗争、経済事情の変化、日貨の世界的進出、支那のパニック等々——を通じて見ても、自分の観察は大体に於て誤りなかつたと思ふ」。

(8) 『倫理学』第三章「人倫的組織」第六節「文化共同体」参照。

(9) 『風土——人間学的考察』第一章「風土の基礎理論」(二〇〇七年、岩波文庫版)。

(大阪大学大学院)